



いづみ

No.86

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 56



《emerge》

中村 修一

(2ページに「作者の言葉」)



自作自選 56

作者の言葉

インスピレーションをもらい、陶を素材に作品を作っています。また、野外展などに参加させていただく機会があり、その場所の空気感と調和できるように意識をしております。昨年9月から12月にかけて本郷新記念札幌彫刻美術館で開かれた「生命体の存在」展では道路の横や中央分離帯にある一般には「雑草」と呼ばれてしまう中の力強い生命体が、それぞれ群を作っている様子をイメージして構成しました。

タイトル	: emerge
制作年	: 2023年
素材	: 陶
サイズ	: H60×W500×D200 cm
設置場所	: 作者蔵

(1970年、北海道出身)

連載

宮の森の四季 56

本郷新記念札幌彫刻美術館

対話による鑑賞（ハロー！ミュージアム）

業務係 白浜 玲

「ハロー！ミュージアム」を担当して約8ヵ月になります。「ハロー！ミュージアム」とは、札幌市の小学校5年生を札幌芸術の森、本郷新記念札幌彫刻美術館に招待し、芸術作品の鑑賞やそれを踏まえた表現活動に取り組む機会を学校へ提供するものです。

この「ハロー！ミュージアム」では、児童は3つの約束（走らない、触らない、観ているひとの邪魔をしない）などの基本的な美術館でのマナーを事前学習で学び、3つの技（近くからみる、遠くからみる、いろいろな角度からみる）を用いて自由に鑑賞します。

特徴的なことは協力員（ボランティア）とともに「対話による鑑賞」を行うことです。この対話では、感じたこと、見たことを自由に発表してもらい、理解を深めます。そこには学校で習うような正解はありません。児童の発想、想像力は実に豊かで対話に参加していると、あらたな発見や気づいていなかったことに気づかされます。また、携わっている人も実にさまざま（学芸員、美術館スタッフ、協力員、引率の教員など）、どの人が欠けても実行することができないように感じます。

毎回、様々なディスカッションが繰り広げられ、そこにはいつも学びがあります。今年度、彫刻美術館では17校、721名を受け入れました。来年度に向けて、この「ハロー！ミュージアム」の事業をより良いものにするため、日々考えながら業務にあたっています。



彫刻家の背中を追って

彫刻家・旭川市立大学短期大学部教授 椎名 澄子

「彫刻の街」として、かねてより憧れの地だった旭川に転居して11年が経ちます。

かれこれ30年以上も前のことですが、大学受験で浪人した1年目の秋頃に、イタリアの彫刻家ファッツィーニ展を鑑賞したのを機に、私はそれまで高校の美術コースや美術予備校で学んできた油彩画から、彫刻での受験に転向しました。当時通っていた予備校には、彫刻を学ぶ生徒はまだ少なく、ロダンの彫刻集をお手本に一人で必死にデッサンをしていた記憶があります。今思えば、私にとって間近に本物の彫刻家を感じる手立ては、唯一それだったように思います。

浪人生活2年目の春からは、立川市にある大手美術予備校へ通い始めました。東京での生活で一番困ったのが、「季節感」を感じられない点でした。いつの間にか夏が来て、いつの間にか冬が来る…。春の匂いや秋の雪虫で、ゆっくりと季節の変わり目を感じていた札幌での生活からは、少々物足りなさを感じていました。そこで「雪を見たい！」の一心で飛行機に飛び乗り、突如、札幌に帰ってきたこともありました。その頃、よく通ったのが、本郷新記念札幌彫刻美術館と中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館です（東京では、制作に行き詰まるといつも通っていたのは、朝倉文夫彫塑館でした）。

札幌彫刻美術館では、記念館が特にお気に入りです。入口で靴を脱ぎ入館す

るたびに、彫刻家のアトリエにこっそりお邪魔した感覚になりました。また、限られた空間に並ぶ大きな彫刻作品と石膏原型や制作道具を観ることで、彫刻家の命を感じ、胸が熱くなったことを覚えています。

旭川市彫刻美術館もまた、母の運転する車で何度も通った場所です。美術館の帰りには、必ず旭川市内のトンカツ屋さん立ち寄り、母を相手に好きな彫刻家の話や刺激を受けた作品の話をするのが定番のルートでした。藝大入学後にも何度も足を運び、そのたびに、恩師や先輩たちの凄さを目の当たりにし、まだまだ背中も見えていないことに気づかされた思いでした。そして、今でも美術館の美しい建物に足を踏み入れると、何とも言いがたい柔らかな気持ちと緊張感に包まれます。浪人時代から藝大生時代、そして創作を続ける現在でも、私にとっては聖地のような場所です。

令和5年10月21日～令和6年2月18日まで、中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館で個展「椎名澄子彫刻展『風にふれて』」を開催していただいております。まだまだ先輩たちの背中では遠く感じていますが、多くの皆さまに御高覧いただければ幸いです。

最後に、このような機会を与えてくださった中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館前館長の山腋雄一氏に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

「アルテピアッツァ美唄」訪問記

東京造形大学教授

屋外彫刻調査保存研究会事務局長 藤井 匡

2023年11月2日、札幌彫刻美術館友の会の高橋大作会長と橋本信夫名誉会長、美術館の泉沙希学芸員の案内でアルテピアッツァ美唄を見学した。このミュージアムのことは以前から知っていたものの、行く機会がなく、今回が初めての訪問である。

時期的には、冬支度に入る直前になるのだろう。屋外での彫刻鑑賞の場合、その印象は天候・気候に左右されるところが大きい。今回はよく晴れた日となり、太陽光のなかでの大理石の白色がとても美しかった。すでに指摘されていることだが、安田侃の彫刻では、イタリア産大理石の「白」の印象が非常に強い。抽象的な形態であることから、緑色をベースとする周囲の色との明確なコントラストが生まれるが、その対比は決して強すぎるわけではない。これは彼の彫刻の形態と表面の仕上げが、そうした対比関係を意識して、丁寧にコントロールされていることに由来する。自然との対比と同化がバランスよく実現されているといえる。

そうした彫刻家のコントロールは屋外彫刻の配置にも見ることができる。平坦な旧校庭にほどよい距離で彫刻が置かれ、そこから振り返るような方向で緩やかな斜面を登ってゆき、点在する彫刻を見ることになる。全体の見通しは悪くはないが、良すぎるわけでもない。仮に、それが悪ければ、鑑賞者は作品に気づかずにおわることになりかねないし、それが良すぎれば、

わざわざ歩いてゆこうと思わないかもしれない。鑑賞者が次の彫刻に期待を抱きながら歩くのにちょうどよい位置と距離に配置されるのである。もちろん、その前提となる土地や環境の整備から丁寧に考えられている。

そして、こうした自然と彫刻との関係が成立する理由としては、安田の彫刻家としてのスタンスも大きく関与している。安田は、新しい形態を次々に開発し、作風を大きく展開してゆく彫刻家ではない。逆に、限られた数のテーマを深く掘り下げてゆく彫刻家である。数多くの実績をもつ作家ではあるものの、実は、作品のタイプはそれほど多くはない。仮に、作風の推移の激しい作家であれば、こうした空間全体での統一感をつくることはむづかしかったかもしれない。作品を時系列で並べるとか、一点ごとにキャプションで説明を加えるとかの工夫が必要になったかもしれない。アルテピアッツァ美唄は安田自身の構想によるものだが、それは単純な意味ではなく、長年にわたる安田の彫刻家としての活動と深く結びついているのである。

近年、私は屋外彫刻を「にぎわいの美術」と「やすらぎの美術」との対比として考えてきた。安田の作品は、東京ミッドタウン（六本木）や東京国際フォーラム（有楽町）など、にぎやかな場所でも見てきたが、やはり、その本質は「やすらぎの美術」にあるのだろう。そのことを再確認することのできた訪問になった。

2023年の彫刻清掃を振り返って 手掛けた彫刻 31点 天候に恵まれ

若い力の参加を期待

会員 小笠原 悦子

2023年の彫刻清掃は5月14日、中島公園にある《猫とハーモニカ》ほか5点から始まり、11月3日、本郷新記念札幌彫刻美術館主催の「サンクスデー」への協力まで、全9回実施しました。コロナの5類移行で屋外での作業にも参加しやすくなり、また天気にも恵まれ、予定した彫刻の清掃を終えることができました。手掛けた作品は31点、協力いただいた方は延べ108人に上りました。

8月5日に行った中島公園では《母と子の像》など6体の清掃をしましたが、場所柄子供たちの姿も目立ちました。

観光のシンボル大通公園は二度に分けての清掃スケジュールを立てました。しかし、一年を通して何かしらのイベントが開催されていて、人通りが多く、また、噴水や遊水路周りの通水時期などもあ



子供の参加が多かった
中島公園

り、思い通りにならない場面も多々ありました。そんな中、札幌ロータリークラブ寄贈の《奉仕の道》は公園管理事務所に彫刻の周りを流れる水を抜いてもらうことができ9月に行うことができました。清掃は大通公園ロータリークラブの会員に担当していただき、丁寧に磨き上げられました。

一方、この日は、《希望》も高圧洗浄機での水洗いを実施することができました。また、藤女子大学の学生の参加もあり、《石川啄木像》などの清掃活動を体験してもらい

ました。ここ数年、コロナ禍で活動を休止していた若いボランティアの参加は、何より嬉しい出来事でした。

7月には札幌国際プラザの担当者3人に中島公園にある《木下成太郎像》の清掃、ワックスがけをお願いしました。

CSR（企業の社会的責任）の一環として、海外からの観光客にボランティア活動をしてもらう時に友の会が提唱する「札幌のアートを守る彫刻磨き」を検討してもらおうというもの。実現すれば、友の会の活動も国際的になることでしょう。

本郷新記念札幌彫刻美術館の「サンクスデー」は、6月と11月の2回開催され、その中のプログラム、「洗って味わう彫刻のカタチ」に参加しました。美術館前庭の彫刻は低い位置にあり、来館者と彫刻に触れながらの作業でした。親子連れや若い人たちの参加もあり、友の会の活動を知っていただく良い機会となりました。

街の中で多くの彫刻を見ることができる札幌。しかし、設置後手入れもされずに放置されている彫刻も多く見られます。「街なかの美を守ろう」一友の会の旗に込められたスローガンの下、2024年も彫刻清掃に励みたいと思います。皆様のご協力をお願いいたします。

（小笠原さんは昨年の彫刻清掃活動の全般を担当しました）



高圧洗浄機を使った《希望》像

月形樺戸博物館開館 50 周年記念事業

対談 「彫刻家・本田明二の世界」

近藤泉(本田明二長女) × 吉崎元章(本郷新記念札幌彫刻美術館館長)

彫刻家・本田明二ギャラリーを併設する月形樺戸博物館開館 50 周年記念事業「アートな世界・体験」が昨年 10 月 29 日、ツキガタアートヴィレッジ（旧知来乙小）で催された。講演「彫刻家・本田明二の世界」と題して本田明二の長女・近藤泉さんと本郷新記念札幌彫刻美術館の吉崎元章館長が対談の形で本田さんの彫刻家としての活動や作品などについてエピソードを交えながら語り合った。友の会からも 12 人が参加した。

本田明二さんは月形町生まれで、札幌で育った。旧制札幌二中（現札幌西高）に入学。美術部教師の勧めで革新的、造形的芸術観を持つと言われた東京の木彫家・澤田政廣に師事した。その影響を受けたと言われた作風で期待されたが徴兵され、終戦後は 3 年間、シベリアに抑留された。戦後、札幌に戻り、活動を始めたが、苦しいシベリアでの生活には生涯、触れることはなかったという。

当時、寒冷地の北海道は彫刻制作には向かず、ほとんどの作家が東京に活動の場を求めたが、本田さんは北海道に根を下ろして活躍した初めての彫刻家になった。このころ北海道では開拓記念行事が盛んで、胸像など彫刻の需要もあり、また、人柄から後援会が出来、多くの人に支援された。

本田さんの作品は北海道の厳しい自然が生んだものと言え、作品は一つ一つのテーマについて具象から抽象まで様々な表現で追求したものが多くことが特徴だったという。

また、本郷新さんとは新制作展で知り合い、本郷さんのアトリエで一緒に制作したりして互いに勉強し合っただけでなく、

最後はがんとの闘いだったが、札幌芸術の森のオープンに向けての会議には病院を抜け出して参加、「北海道の作家にチャンス」の言葉を残したそう。

対談の最後に月形の樺戸博物館は当時、反骨精神を持った人たちの歴史を記念しているところであり、反骨精神で自分の道を歩んだ本田明二さんのギャラリーにふさわしいと締めくくった。

(奥井登代)



「彫刻美術館連続講座 2023」

「野外美術館をつくったころ」世田谷美術館・酒井忠康館長を招いて もっと市民に親しまれる美術館に

「彫刻美術館連続講座 2023」が 11 月 25 日、札幌市の市民交流プラザ「SCART スタジオ」で開かれ、札幌芸術の森造成に深く関わった余市町出身で世田谷美術館の酒井忠康館長が「野外美術館をつくったころ」の演題で芸森誕生のころを語った。

酒井さんは開設計画の最初から関わり、雪が深く、寒さが厳しい土地での野外彫刻館を造るにあたって、彫刻の位置、設置の仕方をどうするか

ど多くの苦労があったと話した。また、芸術の森の今後については「もっと市民に支持されるための工夫が必要ではないか」と指摘。さらに「生きている空気が感じられるものにしていかねばならない」などと提言した。

(奥井登代)



秋空の下
彫刻清掃 2 題



《希望》像すっきり！
大通公園彫刻清掃
ロータリークラブ・藤女子大と共に

残暑が厳しい昨年9月10日、大通公園ロータリークラブ会員と札幌藤女子大学の学生などを加え20人余りが「オータムフェスタ」でにぎわう大通公園の彫刻清掃を行った。ロータリークラブとの作業は6月に続いて2回目。藤女子大とは初めての共同作業。

清掃は全員で公園のシンボリック存在、《泉》像を手掛け、次いで西2丁目、西3丁目の2グループに分かれ、ロータリークラブのメンバーは札幌ロータリークラブが1982年に寄贈した《奉仕の道》を清掃した。公園管理事務所が水抜きをしてあり、クラブの行動基準を示しているというエゾシカ、エゾ

フクロウ、カラス、エゾウサギの彫刻を水洗いして磨き上げた。

藤女子大グループは西3丁目の《石川啄木像》《牧童》を担当。バケツでの水運びやワックスがけ、磨き上げを友の会のメンバーから指導を受けながら熱心に取り組んだ。



最後は全員で西1丁目カナモトホール前の《希望》を高圧洗浄機で水洗い。この像は高さがあることや足場の悪さなどから設置後ほとんど清掃されることがなかったとのことで、水を浴びた女性像はひときわ白く輝きを取り戻したようだった。

彫刻美術館「サンクスデー」

《砂》《裸婦》《堰》3体を洗う

宮の森の秋を楽しむ本郷新記念札幌彫刻美術館主催の「サンクスデー」が昨年11月3日、開かれ、友の会からも高橋大作会長ら13人が参加して、来場者と共に彫刻



清掃を通して新たな芸術鑑賞の仕方を学んだ。

「サンクスデー」は美術館が毎年開いている恒例行事。今回は会期中の展覧会「生命体の存在」、コレクシ



ョン展「石と木」の入場料が無料になったほか、「古チラシのミニバッグづくり」の創作コーナー、吉崎元章館長の講話「本郷新入門」など多彩なプログラム。

友の会は「洗って味わう彫刻のカタチ」をテーマに前庭にある、《砂》《裸婦》《堰》の彫刻3体を小学生など来場者と共にブラシを使って洗い上げた。ぞうきんなどで水をふき取ってきれいになった彫刻に子供たちも満足した様子。

彫刻美術館

アスベスト疑念で一時休館

本郷新記念札幌彫刻美術館は昨年11月、本館、記念館の煙突の断熱材にアスベスト(石綿)を含む建材が使われている疑いから調査のため本館、記念館ともに18日から一時休館した。北海道新聞などによると、アスベストの大気中への飛散がないことがわかり両館とも再開した。本館は18日から21日まで、記念館は23日まで休館した。

事務局日誌▼2023年9月10日＝大通公園彫刻清掃(大通西1～3丁目)大通ロータリークラブ、藤女子大と合同▼14日＝定例役員会(エルプラザ)「デジタル彫刻美術館」の名称変更、会報85号企画など協議▼10月12日＝定例役員会(エルプラザ)会報86号企画、「ぶらり札幌」増刷協議▼29日＝月形町樺戸博物館開館50周年記念事業「アートな世界・体験」(月形町)高橋会長ほか出席▼11月2日＝東京造形大・藤井匡教授来札。会長、橋本名誉会長ら同道▼3日＝彫刻美術館「サンクスデー」参加(彫刻美術館)▼9日＝定例役員会(エルプラザ)会報86号企画ほか

編日集後記▼「アルテピアッツァ美唄」を訪れた藤井匡先生に原稿をいただきました。専門家らしい「安田侃芸術論」、ありがとうございました▼今号では会員の奥井さん、小笠原さんに原稿をお願いしました。本来ならもっと会員の記事を載せたいと思っているのですが…▼新しい年を迎えました。感染症を克服して元気に活動しましょう。(大内)

札幌彫刻美術館友の会
 会報「いずみ」 No.86
 2024年1月1日発行
 発行人 高橋 大作
 編集者 大内 和
 札幌市清田区清田5-4-6-30
 011-884-6025
 印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」86号 目次			
自作自選56	《emerge》	中村 修一	表紙
宮の森の四季56	「対話による鑑賞」	白浜 玲	2
風見鶏	「彫刻家の背中を追って」	椎名 澄子	3
寄稿	『アルテピアッツァ美唄』訪問記	藤井 匡	4
レポート	「2023年の彫刻清掃を振り返って」	小笠原悦子	5
友の会ニュース			6-7
	対談「本田明二の世界」／彫美連続講座「野外美術館をつくったころ」		
	／彫刻清掃2題／彫美「サンクスデー」／彫美臨時休館		
事務局日誌	／編集後記	／目次	／美術館行事予定ほか
			8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本館

■コレクション展「かく語りき 本郷新」

1月19日(金)～5月26日(日)

本郷新は数多くの芸術論、作品論、自伝などを遺しており、美術館ではこれらをボランティアの手を借りながら長年にわたって整理し、データ化作業を行ってきた。本展では、集積されたそれらアーカイブ資料を公開しつつ、言論表現の側面からも本郷新の彫刻に対する思念を浮き彫りにする。

記念館

■コレクション展「石と木」

開催中～5月26日(日)

札幌・大通公園の《泉》の像や戦没学生記念碑《わだつみのこえ》など塑像作品に代表作が多い本郷新だが、石彫や木彫など不可逆性の要素が色濃いカーヴィング作品も手掛けている。本展では、ひととき進取性に富んだ表現を見せる館所蔵のそれらの全部を展示、公開する。

■さっぽろ雪像彫刻展15th

1月26日(金)～28日(日)

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<https://sapporo-chokoku.jp>